



ふわふわの泡が、お風呂場の窓から差し込む夕陽でピンク色に染まっている。あたしは楽しくなって、さらにお湯をかき混ぜて泡を作る。

勢いがよすぎて、バシャッとパパの顔にお湯がかかってしまったけど、パパは笑いながら手で顔を拭っただけだった。あたしは両手に泡を集めながら言った。

「テレビで見たのと一緒にだね。体もお湯の中で洗うの？」

尋ねると、パパは曖昧に頷いてみせた。

「そうだと……思う」

「頭もこの中で洗うの？」

パパは困ったような表情を浮かべて、首を傾げた。

「……どうだろう？ でも、外国のお風呂って洗い場はないから、多分、そうなんだと思う」

「ふうーん」

あたしは泡を吹いて飛ばした。ちぎれた泡がひらひらと舞い散る。とってもいい匂い。

「さて、そろそろ体を洗おう。スポンジがいらいしいんだけど、うちにはないから手の平で洗えばいい」

「背中が手が届かないよ」

「パパが洗ってあげるさ。さあ、後ろを向いて」

パパの大きな手が、やさしく丁寧にあたしの背中を撫でる。くすぐったくてあたしは笑い声を上げた。

やわらかな光が差し込む、早い時間のお風呂があたしは大好きだった。

あたしはシャボン玉を作ろうと指で輪っかを作って、静かに吹いた。

だけど、うまくシャボン玉は作れなくてすぐにパチンと弾けた。

晩御飯のあと、小学校一年生の女の子が連れ去られたというニュースをテレビでやっていた。近所のスーパーに行っていて、母親が少し目を離した隙にいなくなったらしい。

あたしはジュースを飲みながら、そっとパパを盗み見た。パパはじっとテレビを見たまま、とても、怖い顔をしていた。

「今まで大事に育ててきた娘がさらわれるなんて、ひどすぎる。たった一つの大切な宝物を自分勝手な理由で奪われて、どこにいるのか、生きているのか死んでいるのかさえも分からないだなんて、ひどすぎる。それならばいっそ、目の前で殺されたほうがいい。あきらめがつくから」

その言葉にあたしは驚いて、真っ直ぐパパの顔を見た。

死んでいるより、生きての方がいいに決まっている。どうしてそんな怖いことを言うのかわからなかった。

あたしの視線に気づいたパパは、乱暴にティッシュを掴んで鼻をかんだ。

テレビに目を戻しながら、あたしは何も言わずにジュースを飲み干した。テレビの画面は、明

るい音楽の流れるCMに変わっている。

「ママがいなくなったとき、パパは決めたんだ」

唇にコップをあてたまま、あたしは再び横目でパパを見た。パパは少しうつむいて、真面目な顔をしていた。

「絶対に、里美を守ってみせるって。少しでも多くの時間を、里美と一緒に過ごそうって。だから、少しお給料は下がってしまったけど、今日みたいに日曜日は必ず休めることが嬉しいんだ」

「うん……」

あたしは頷いて、パパの方を向いた。パパも顔を上げてあたしを見た。

少し鼻の頭は赤かったけど、もう、いつもの、やさしいパパの顔に戻っていた。

冷たい布団の中に入り込む。

パパの乾いた手で体中を撫でられるのは、とても気持ちがいい。パパもあたしも裸で寝るのがお気に入りだった。

あたしは大きく伸びをして、仰向けになった。

カーテンを開けた窓から外の光が差し込んで、薄明かりの中、ひじ枕をしたパパの顔が見える。静かで、やさしい顔だった。

あたしは安心して大きく息を吸い込み、それから目を閉じた。

低い唸り声で目が覚めた。目を開けると、まだ窓の外は暗くて夜だとわかった。あたしはパパを見た。

「パパ？ どうしたの？ どっか痛いのか？」

布団の中で体を丸めて向こうを向いていたパパの背中が、凍りついたように動かなくなった。あたしは心配になって、起き上がろうと手をついた。

「パパ？」

「――こっちを、見ないでくれ」

かすれたような小さな声で、パパは言った。

「パパ？」

あたしは怖くなった。

「大丈夫だから、ちょっとだけ、動かないでそのままいて」

こっちを向かないまま、パパは言った。怖かったけど、あたしは覚悟を決めた。

「パパ、変身するの？」

パパの背中が小さく動いた。わずかに首を動かして、肩越しに横顔を見せる。

「……へんしん？」

横になったままあたしは頷いた。

「だって、今夜は満月でしょ？ 満月の夜は、狼男は狼になっちゃうんだって。……パパ、狼男だったの？」

「……………」

あたしは急いで言った。本当は狼男なんて、作り話だってわかってる。でも、知らない振りをして大真面目に言ってみせた。

「でも、狼男でもいいよ。パパが狼男でも、あたし、いいから」

張り詰めていた空気が、ふっと緩んだ気がした。ようやくパパの横顔に、笑みが浮かんだ。

「里美はいつも面白いことを言うなあ。狼男に変身だなんて、なんで思ったの？」

「教室にあった本に書いてあったの。狼男は満月の夜に変身するって。それでね、銀の鉄砲の弾じゃないと死なないんだって」

パパは低く笑い、体の向きを変えて腕を伸ばした。そのままあたしを胸に抱え込む。パパの体は熱くてちょっと汗の臭いがしたけど、それは嫌な臭いじゃなかった。

「パパは里美になら、鉄砲で撃たれてもいいよ」

「撃たないよ」

あたしはパパの顔を見上げた。薄明かりの中、パパの顎に短い髭が生えているのが見えた。

「だってパパが狼男なら、あたしは狼男の娘だもん」

「そうだな」

小さく笑ったパパはあたしの頭を撫でた。

あたしは指を伸ばして、パパのザラザラした髭を撫でながら言った。

「そして、ママは雪女だったんでしょ？ だってママの名前は雪だったんだから」

雪女も作り話だって知ってる。でも、パパをもっと笑わせたかった。

パパはあたしの髪を撫でながら頷いた。

「そうだったのかもしれないなあ。ママも里美と一緒に、色白だったし」

「雪女だったから、いなくなったの？」

「お話では、雪女はどうしていなくなったんだったっけ？」

あたしの頭の上で、パパは尋ねた。真夜中に聞くパパの声は、いつもと少し違う気がした。

「秘密を話したからだよ。誰にも言うなって言ったのに、昔、お前みたいなきれいな女に会ったことがあるって、言っちゃったんだ」

「……そうか。秘密を話したからか……」

パパは呟くように言って、あたしをもっと強く抱き締めた。

——そんなパパが、あたしは大好きです。四年二組、〇〇里美」

作文を読み終った後、あたしは気付いていなかった。先生の顔がかすかに引きつっていたことに。

数日後、男の人二人と、一人の女の人が家に来た。

男の人達がパパと話している間、あたしは隣の部屋で女の人に色々聞かれていた。

ママはいつからいなくなったのか。学校から帰って、パパが家に帰ってくるまで家で何をして遊んでいるのか。寂しいことはないか。いつもお風呂は誰と入っているのか。寝る時はどうやっ

て寝ているのか。

女の方は口に笑みを浮かべて、でも、眼鏡の奥の目はとても怖くて、あたしはほとんど返事ができなかった。

その後のことは、途切れ途切れにしか、覚えていない。

知らない人たちはその後も何回か家に来て、それから、パパが、何かを叫んで、台所から持ってきた包丁で、男の人を刺した。止めに入った女の方の、顔と手も。

赤い血が、たくさん飛んだ。

もがくように崩れ落ちたから、玄関と廊下の壁に、いっぱい血の筋が付いた。

そして、パパはあたしを見た。息を切らせながら、頬に血飛沫が付いた怖い顔で。

パパはあたしの腕を掴んで、それから、すごく、やさしい顔で笑ってから、包丁を持った手を振り上げた。

気がついたら、パパは床に押さえつけられて、それから、それから――。

あたしは知らない子供がたくさんいる、白く大きな建物に連れて行かれた。

――悪いのは、あたし？ 秘密を話してしまった、あたし？

――終――